



# かなであん

249-0002 返子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net) mail: [ryukeiji@kanadean.net](mailto:ryukeiji@kanadean.net)

## 在し日の母が勤行(つとめ)の 正信偈 わが耳底に 一生(ひとよ) ひびかむ

私たちは仏教徒であって、その中の真宗門徒、念仏者を自覚するときはどんなときでしょうか。

今から約800年前、鎌倉時代にお生まれになった親鸞聖人のみ教えに育てられ、その教えに導かれ生かされて生きてきたお念仏の仲間をして真宗門徒と言っています。その祖師・ご開山と慕われてきた親鸞聖人「報恩講」を今年もお迎えます。

法然上人を師と仰ぎ、その教えお念仏に生きることを自らの生き方で私たちにお示し下さった親鸞聖人のご生涯を偲び、み跡をお慕いして勤める、浄土真宗を最も象徴するご法要です。

「報恩講」は親しみをもって、「ほんこさん」とよばれて伝えられてきた、私たちのご先祖の方々が心から慕われた親鸞聖人のご法事であり、継承して下さったご先祖のご恩にも報いる思いも重なるご法要でもあります。

\* \* \*

報恩講はもとより、日々のお勤めで読まれるのが、親鸞聖人のお書きになったご本典「教行信証」の中にある『正信念仏偈』という120行の詩(偈)です。真宗門徒のよりどころとすべきこの偈は、

『正信偈』として大切に親しまれてきました。

かつて、土俵の鬼とよばれた名横綱・初代・若乃花の幼い長男が、煮えたぎるちゃんこ鍋の中に転げ落ち、無残な死をとげるという事件がありました。悲嘆にくれる父親に代わって部屋の者が近くのお寺さんに依頼し仮通夜がはじまりましたが、そのお経を聞いていた若乃花が突然、「これはうちのお経じゃない」と言い出し、「うちのお経」はどんなお経かとたずねたところ「きみょうむりょうじゅによらい……」と、『正信偈』の始めの句を称えたことから、真宗のご門徒であったことがすぐにわかったという話を聞いたことがあります。きっと若乃花のご両親や、おじいさんおばあさんが、お仏壇の前で朝な夕なに称えていた

『正信偈』を聞いて育ち、いつの間にか身に染み込んでいたのでしょう。そして何より、我が子を先に送るといふ悲しみの中で、その子の往くところが、自分の親や先祖が先に往っておられるお浄土だということが、親心の切なる思いであったに違いありません。

また、鹿児島別院の布教所の前に生家があったというフランキー堺が、朝夕布教所から聞こえてくる『正信偈』を聞いて育ち、門前の小僧よろしく、ジャズマンの耳のよさもあって、上手に、また楽しそうに『正信偈』を称えるのを

テレビで観て、ほのぼのとしたこともありました。

正信偈のリズムは耳に心地よく、自然に身に染みていきます。字が読めるようになると聖典の難しい漢字の横に書かれた髭のようになしるしと抑揚との関連もわかるようになってゆく子や孫の姿は、同じお念仏の仲間であることに気づかせてくれ、何よりありがたく思えるものです。

今は所属寺や地域の寺を越えて交流が盛んになり、ご本山や別院の正式な作法にふれる機会も増え、CDなどの普及で、皆さんが正調に近い正信偈を称えられるようになりましたが、称え慣れた自己流の節でおおらかにご唱和下さる正信偈も大好きです。その人の生まれてから今日までの多くの有縁の方々から称え継がれ耳にした、からだに染み込んだお念仏の人生の歴史が感じられるからです。

\* \* \*

帰命無量寿如来 南無不可思議光ではじまる「正信偈」。「無量寿如来」も「不可思議光如来」も浄土真宗のご本尊である阿弥陀仏の別名です。「私は、いつ、どこでも、一緒にいて下さる、限りないのちとはかり知れない光明をそなえた阿弥陀さまに、身も心もおまかせします」と親鸞聖人ご自身の信心を吐露することばかりはじまっています。真宗門徒もこの

## 宗祖親鸞聖人 報恩講ご案内

日時  
11月26日(火)  
午前11時より

「真宗宗歌」

正信偈

法話

川路弘美 師

元ハワイ開教使

(ハワイ在住)

御文章拝読

「恩徳讃」

～\*～

おとき

～\*～

お抹茶接待

不安定な気候の中でも今年も実りの秋を迎え、報恩感謝の集い「報恩講」をお迎えできること、ほんとうに嬉しく有り難いことです。この度は、以前にもご縁を頂きました川路先生の来日を知りお願い致しました。真宗宗歌の「海の内外のへだてなく…」を心から共感できる海外開教使の先輩です。皆さまのお参りをお待ちしています。



## バロン惜別

夏に倒れてから衰えの加速が増し、別れの近いことを覚悟させ、ご心配いただいております。老犬バロンが、11月9日に亡くなりました。20歳でした。人間で言えば百歳を越えていたでしょうか。大往生でした。

北海道の自坊の「報恩講」を勤めに帰る間、なじみの動物病院に入院する予定の前日のことでした。おむつの生活ながら、排便は庭に出てする気丈夫さをまだ持っていて、その朝も立派な排便を済ませ朝ご飯もゆっくり時間をかけて完食したあと、コトツと横になったと思ったらそのまま尊厳すら感じさせる安らかな最後でした。



男爵ジャガイモの畑で拾った子犬ですから雌なのにバロンと名づけ、一人で寺を守る母の慰めにと連れ帰ってから、北海道で12年、母亡き後逗子に来て8年、環境の変化の中でも我が身の居場所をすみやかに見つけ、しっかりと生き抜いた姿に人間を重ね合わせては色々なことに気づかされました。

やはり、「ありがとう」の他にふさわしい言葉は見つかりません。合掌

## 編集後記

またまた発覚した食品偽造問題、言葉は悪いかもしれないが、いいんじゃない?!と思った。この発端は、消費者側に違いを見分ける舌も目もないブランド志向の人間が多いという現状が生んだ愚かしい現象だからだ。本来なら騙された方が、自分を恥じて黙っているのがほんとうのプライドというものだと思うが、騙された、心外だ、と公言する気が知れない。■提供する側はほくそ笑んでいたに違いない。何故ならそういう輩ほど、「やっぱり〇〇産は違うね」とか、「うちは〇〇産しかダメなのよね」とか、うんちくを垂れては恥をばらまいているからだ。カウンターや調理場の向こう側でそれを聞きながら、いくらでも騙せると思わせたのも、そういう消費者の思い上がりからだと思う。■何故偽装するのかと言えば、そこに書かれたブランド名だけでありがたがってくれる相手には、そのものよりも銘柄こそが大切で、そういう人は何かにつけそうだから、すべて学歴や肩書きや銘柄などの尺度でしか判断できない自信のない人たちには、庶民的な店でなく、有名ホテルであり、有名デパートである必要があるからなのだ。■躰や教育では、好き嫌いを言うてはいけなさとされてきて、言葉では「好き嫌い」を言わなくなった代わりに「善し悪し」を言うようになった。それも、〇〇大学だからよい。〇〇出だから上品。〇〇産だから美味しいなど、自分の目や感性で判断してはいない。■肩書きや銘柄で決めたものはほんとうの好き嫌いではない。それは打算と自信のなさの裏返しの結果だ。だから裏切られた、バカにされたと腹も立つのだろう。たとえ他人がくだらないというものであっても、安いものであっても、自分にとっての嗜好にあった感性で選んだものなら騙されても悔いはないはずだ。■親鸞聖人が、師である法然上人の教えに生きて、「たとえ騙されて地獄に墜ちたとしても後悔はない」と言い切られたのは、後生の一大事だけではない。人生すべてへの覚悟だ。ましてそれで命を落としたわけでもない、知るべきはわが身の愚かさなのではないだろうか。